末法思想に支配されていた平安末期の時代

梁塵秘抄と名ずくる事　虞公。韓峨といひけり　声よく妙にして他人の声およばざりけり　聴くもの賞で感じて涙おさへぬばかり也　うたいける声の響きに　梁の塵たちて三日居ざりければ　梁の塵の秘抄とはいふなるべしと云々

＊「梁塵秘抄」は平安末期保元二年から治承三年後白河法皇により編さんされた今様を中心とする歌謡集です。書題の「梁塵」は梁の上に積もった塵の事　魯の国に虞公という美声の歌手が一たび歌うと人間はもとより梁の上に積もった塵も感動して舞い上がったといいます。この故事からすぐれた歌謡や音楽をたたえて”梁塵を動かす”と表現される。「秘抄」の秘は奥深いことの形容で抄は抜き書きの意とある。

長歌・古柳・今様と今昔説話は、衆庶の日々の生活の実態が豊富にとりあげられている。今様は平安後期に流行した歌謡でその当時流行した歌謡である。

梁塵秘抄にのる「法文歌」

＊法華経八巻は一部なり　二十八品何れをも　須臾の間も聴く人の　仏に成らぬは無かりけり

＊法華経このたび弘めむと　仏に申せど許されず　地よりいでたる菩薩たち　その数六万恒沙なり

＊法華経八巻は一部なり　二十八品そのなかに　あの　読まれたまふ　説かれたまふ壽量品ばかり　あはれに尊きものはなし

＊仏に華香たてまつり　堂塔建つるも尊しや　これにすぐれてめだたきは　法華経持てる人ぞかし

＊釈迦の月は隠れにき　慈氏の朝日はまだ遙か　そのほど長夜の暗きをば　法華経のみこそ照らいたまえ

平安末期は　正・像・末　の三時から拝すと、末法の始まりの二百年前頃と言われています。

この当時の人々の教養は、今時の我々より、知的であったとおもう。

世尊於長夜　常愍見教化　開結　三七二

世尊は長夜において、常に愍(あわれ)んで教化せられ、無上の願を種えしめたまえり。

御書にある【長夜】抜粋

諸経と法華経と難事の事　一四六八ページ　十

生死の長夜を照らす大灯、元品の無明を切る利剣は此の法門に過ぎざるか。

諸宗違目事　六〇〇ページ一

末代不相応の思ひを為して国中を誑惑して長夜に迷はしむ。之れを明らめし導師は但日蓮一人なるのみ。

祈禱抄　六二七ページ　一七

長夜に日輪の出でたらんが如く、あかなくならせ給ひたりしかば、仏の仰せ無くとも法華経を弘めじ、又行者に替らじとはおぼしめすべからず。されば「我不愛身命 但惜無上道」、「不惜身命」、「当広説此経」等とこそ誓ひ給ひしか。

撰時抄　八三四ページ　一五

一念三千は九界即仏界・仏界即九界と談ず。されば此の経の一字は如意宝珠なり。一句は諸仏の種子となる。此等は機の熟不熟はさてをきぬ、時の至れるゆへなり。経に云く「今正しく是れ其の時なり、決定して大乗を説かん」等云云。　中略

法華経の第二に云く「無智の人の中に此の経を説くこと莫れ」。同じき第四に云く「分布して妄りに人に授与すべからず」。同じき第五に云く「此の法華経は諸仏如来の秘密の蔵なり。諸経の中に於て最も其の上に在り。【長夜】に守護して妄りに宣説せざれ」等云云。此等の経文は、機にあらずば説かざれというか、いかん。

上行所伝三大秘法口決　一七〇四ページ

因縁及次第　　御書に云く「多く外典漢書等の例を引く」
随義如実説　　御書に云く「天晴れぬれば地皆明らかなり」
如日〈本門に譬ふ〉　月〈迹門に譬ふ〉　光〈体本〉　明〈用迹〉
能除諸幽冥　　御書に云く「生死の【長夜】を照らす大灯明」
斯人行世間　　五道の中の人道に託す、高祖は人間に御誕生。
能滅衆生闇　　御書に云く「元品の無明を切る大利剣」
教無量菩薩　　此の経を持つ人を菩薩と名づく。
畢竟　　必定と云ふ事なり。
住　　即身成仏。